

Vol.16
2021年
春・夏号

上町台地 今昔タイムズ

企画・編集：U-CoRoプロジェクト・ワーキング
(CEL弘本由香里、B-train橋本護・小倉昌美)
http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html

発行：大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
※U-CoRo=ゆーこーろ (上町台地コミュニケーション・ルーム)
問合せ先：tel.06-6205-3518 (担当：CEL弘本)

「上町台地 今昔タイムズ」とは

わたしたちが暮らす「上町台地」。古代から今まで絶えることなく、人々の営みが刻まれています。天災や政変や戦災も、著しい都市化も経験しました。時をさかのぼってみると、まちと暮らしの骨格が浮かび上がってきます。自然の恵みとリスクのとらえ方、人とまちの交わり方、次世代への伝え方…。過去と現在を行き来しながら、未来を考えるきっかけに、U-CoRoプロジェクト第2ステップでは、壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」を制作いたします。

勧進相撲は新地振興のために

江戸時代、現在の大相撲につながる相撲興行は、大坂、江戸、京都の三都で開催されるようになり、大規模な興行を支える渡世の相撲集団が生まれていました。その大坂で公に許された勧進相撲興行の最初は、元禄15 (1702) 年に堀江新地の振興策として開かれたものだと言われています。その後、難波新地での勧進相撲も許され、両地を拠点とした開催となりました。全国から集った力士による白熱した取組みが観衆を熱狂させた大人気となったほか、力士の姿は錦絵に描かれ、淨瑠璃のモデルや角力人形などの玩具にもなりました。

聖と俗のあわいで安寧を願う 上町台地相撲パノラマ

西方に海を臨み、東方に河内平野が広がる、大阪の原点・上町台地。古くから、水陸交通の結節点、都市と農村の境目、新しい時代と旧い時代が混じり合う場所は、たまた彼岸と此岸を行き来する、聖と俗が隣り合う地として、大阪の風土を形づくってきました。その歩みに寄り添うように、営まれてきたのが「相撲」です。大地を踏み鎮め、邪鬼を払い、豊穣を祈り、土地を拓き、繁栄を導き、疫病退散や災害からの復興を願い、まちの生命力を引き出す役割を担ってきたといってもよいでしょう。上町台地から相撲とまちの縁を眺めれば、新たな時代を拓く力が湧いてくるようです。

奉納神事と娯楽の相撲

古くからの宮中の相撲節会(せうえ)の様式をまねて、江戸時代には神社の祭礼などでも相撲が催されるようになっていきます。祭礼に集まった大勢の人々も、神前での相撲の取組みを楽しんで観るようになりました。こうして相撲は、神慮をはかる神事であると同時に、観覧する技芸、娯楽としての道をたどることになります。



江戸時代前期の大坂の年中行事を紹介する地誌『難波鑑』の九月十日「高津祭と相撲」の挿絵。高津宮本殿の前で相撲をとる光景が描かれている。

上町台地・寺町の西方に、堀江や難波の新地が見える



地図は文化3 (1806) 年「増補改正撰州大阪地図」(大阪市立図書館デジタルアーカイブ)

寺町と相撲の深い縁

四天王寺から生國魂神社、高津宮付近の寺町が密集するエリアで、寺町と総称されています。それは豊田秀吉の城下づくりに始まり、江戸時代にも寺院の移転が進められたためと伝えられます。昔から、この地の寺は難波新地で勧進相撲が開催される際に相撲部屋に宿舎を提供したり、また近代に至る時期まで、界限には複数の大阪相撲の部屋があったようで、その伝統を受け継いで、近年でも大相撲大阪場所の際には寺院が来阪する相撲部屋に宿舎となっていました。特に昭和30年代には、大多数の部屋がこの寺町界限に宿舎を設けており、一つの風物詩にもなっていました。大阪で盛んな川柳にも、右のような一句があります。



『歌・短歌・俳句・一冊一冊』(香泉堂・1983年)

大阪のまちの形成と「相撲」

飯田直樹さん (大阪歴史博物館学芸員)

江戸時代、堀江新地の開発は幕府主導でしたが、なかなかうまく進まず、振興策として大規模な勧進相撲が始められました。その経緯から、大阪の相撲の拠点はまず堀江にありました。一方当時、上町付近にも別の拠点が存在していたようです。おそらく、大阪では、もともと上町台地に、荷役作業に従事する仲仕たちを基盤にした相撲集団があって、新地開発に伴い堀江で生まれた相撲集団と競合する状況が生じ、それが近代の大正期まで続いていたと思われる。『タニマチ』という言葉のモデルになっている医師・薄野一(すきじい)の病院は谷町六丁目にありましたが、その近くには当時、複数の相撲部屋があったろうと思われる。古くは「藤島部屋」が高津神社の近にあったのはわかっていますが、大正期でも周辺に相撲部屋があって、その伝統が「タニマチ」の言葉の淵源にもなっていたのだろうと考えられます。大正期に大阪の国技館が新世界に建てられています。その地が選ばれた明確な理由は分かりませんが、新しい土地が生まれた際に、その振興策として、江戸時代から人々を熱狂させてきた「相撲」は、ある一定の役割を期待されてきたのだと言えます。

博覧会跡地に生まれた大阪国技館

明治36 (1903) 年、天王寺で開かれた第五回内閣勲業博覧会の跡地は日露戦争に際し陸軍用地となった後、東半分は天王寺公園となり、西半分は明治末年に「新世界」として開発されました。その新世界に、大正8 (1919) 年、完成したのが大阪相撲の悲願「大阪国技館」。その後、昭和2 (1927) 年東西相撲協会合併まで、大阪相撲の殿堂として活用されました。



東京の両国国技館に対抗して、大阪でも大正8 (1919) 年、新世界に大阪国技館を建設。建坪500坪、収容数7000人、丸屋根の洋風建築の外観の建物で、落成記念として東西合併大相撲が10日間わたって開催され、その後も昭和2 (1927) 年まで本場所などで活用された。『大阪市・パノラマ地図』大正13 (1924) 年(提供：大阪くらしの今昔館)

「大阪角力人形」がつながるもの

大正から昭和にかけて大阪で活躍した絵師・画家の川崎巨泉(人魚洞)が描いたおもちゃ絵の一枚。第五回内閣勲業博覧会の頃に、下寺町・遊行寺門前の店で売られていたという角力人形の絵に覚書が添えられています。この店は、ちょうど愛染坂の登り口の近くにあり、大阪の難波と上町台地の寺町をつなぐところにあつた。



大人も魅了した角力人形のおもちゃ絵



川崎巨泉(人魚洞)が描いたおもちゃ絵の中に、「大阪角力」と冠した名前のおもちゃがたくさんあります。種類も多彩で、当時は子どもたちの遊び文化のなかにも「相撲」がいかに浸透していたのかがよくわかります。角力人形『人魚洞文庫』より(大阪府立中之島図書館「人魚洞文庫データベース」)

台地のそこそこに刻まれた相撲の足跡

江戸時代に遡る歴史のある墓地进行と、大相撲から村相撲まで、力士のお墓がたくさん遺されていることに驚かされます。大阪の風土と相撲が、いかに深い絆で結ばれてきたかがわかります。近世から近代へ、戦災や災害からの復興へ、大阪のまちと相撲も、時代の荒波とともに乗り越えてきました。戦後の四天王寺伽藍復興の勸進相撲など、その象徴ともいえるでしょう。また、大阪での大相撲本場所の際に、かつて多くの相撲部屋長の宿舎が設けられた寺町界隈には、今も、春を呼ぶお相撲さんの思い出があたたかく息づいています。

生涯を相撲と社会のタニマチとして

中村正廣さん（医療法人共済会中村クリニック院長）

祖父の中村広三は、昭和の時代、相撲好きの人のなかでは、ちょっと知られた人物でした。テレビの大相撲中継を見ていると、いつも砂かぶりに座っている、巨漢の白ひげの男がそう。本人も学生相撲や社会人力士として数々の栄誉を受けた実力者でしたが、結局、相撲好きが高じて、相撲文化全般を支援することになった生涯でした。特に戦後は、相撲を通して人心や地域復興の心をくましました。たとえば、昭和23（1948）年の大阪市福島公園の仮設相撲場や昭和28（1953）年からの府立体育館での大相撲の本場所開催にも尽力し、「東西会」という相撲振興のための有志の組織の会長を長く務めました。昭和36（1961）年には、四天王寺の伽藍復興のために、新横綱の柏戸・大鵬の二人を招いて勸進相撲を開催し、その後、東西会として仁王門の金剛力士像を寄進しています。よくタニマチだと言われましたが、祖父は相撲をひとつの文化として捉え、相撲道を考えていこうとしていました。そういう生き方を生涯続けた人でした。



雑誌の「大阪のお相撲さん 各部屋宿舎めぐり」記
昭和30年代、春場所の時期に寺町の辻や通りには、お相撲さんがいっぱい！
（「相撲」1961年3、4月号 ベースボールマガジン社）

昔から相撲に由縁が深い高津宮界隈

小谷真功さん（高津宮宮司）

江戸時代の記録に残る高津宮の相撲会は、秋の収穫を占うものだったようですが、残念ながら今は途絶えてしまっている。相撲と言えば、昭和36（1961）年に、本殿の竣工を祝して、横綱朝潮の人数入（すくい式）が行われたことで、そのときの記念写真が残されています。

また、その本殿の中に、現在、昭和44（1969）年春場所に出た大鵬、柏戸ら有名力士たちの手形とサインが飾られています。これは、造形美術家の池田遊子さんの遺品にあったのをご子孫が数年前に奉納してくださったものです。

安井徳子さん（高津宮職員）

私は、今から4代前の宮司の末娘として終戦後に生まれ、この神社内で育ちました。昭和36（1961）年の人数入式は見ませんが、学校から帰ったら、とんでもない大きなざうりかあってびっくりしたのを覚えています。昭和30（1955）年頃は、子どもでも勝手に大坂場所の相撲宿舎に稽古を覗きにいました。また、境内の階段で足腰を鍛えているお相撲さんの姿も時々目にしました。その頃は、大坂場所の時期には、お相撲さんたちがまちを歩き、近くの銭湯に行っており、この界隈で暮らしているという感じがした。

下町町の角力人形の店

角力人形の店は、第五回内閣博覧会（1903年）頃には遊行寺門前にあった。その後、近隣の他店で売られたものも。写真は、郷土研究「上方」115号（昭和15（1940）年）の口絵（天王寺下町町にあった角力人形店）。人形は張り子で、足に土が入っていて、二体で取り組ませて遊ぶようになっていた（「上方」同様の松村百庵『郷土天王寺みやげ』による）。

大阪国技館跡

大正8年（1919）に建設された新世界の大阪国技館跡は昭和2（1927）年に大阪相撲協会が解散すると、空室、映画館として再出発。その後取り壊され、現在は跡地に石碑だけが残る。

●上町台地に眠る力士たち

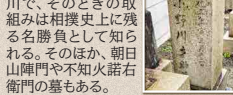
四天王寺 ⑨

四天王寺の墓地には、大阪相撲ゆかりの人々が多数眠っている。明治時代には大阪相撲で活躍した横綱八郎と小野川信蔵や、大関真鶴の9代目朝日山ほかの朝日山代々の墓、初代高田川などの墓が見られ、大阪相撲の立行司である木村玉之助の墓も存在している。



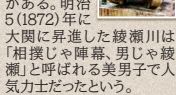
遊行寺（円成院） ⑩

円成院、通称遊行寺（けいぎょう）。この寺には歌舞伎や浄瑠璃、落語関係の古墓が多いが、有名な横綱・小野川喜三郎の墓がある。天明2（1782）年、当時大関の谷風六三郎を止めたのが小野川で、そのときの取組は相撲史上に残る名勝負として知られる。そのほか、朝日山陣門や不知火若右衛門の墓もある。



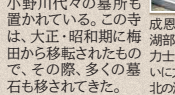
一心寺 ⑪

幕末から明治時代初期にかけて活躍した力士、綾瀬川山左衛門の墓がある。明治5（1872）年に大関に昇進した綾瀬川は「相撲じゃ陣幕、男じゃ綾瀬」と呼ばれる美男子で人気力士だったという。



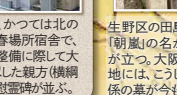
成恩寺（東福寺大阪別院） ⑫

墓地につながる参道脇に相撲墓が並ぶ。三保ヶ関の初代・二代・三代の墓のほか、二代目時津風も置かれている。この寺は、大正・昭和期に梅田から移転されたもので、力士墓の整備に際しては、大いなる力を尽した親方横綱北の湖の慰霊堂が並ぶ。



山響部屋 ⑬

生野区の田島墓地には「朝風」の名がある墓が立つ。大阪近郊の墓地には、こうした相撲関係の墓が今も数見られる。



聖と俗のあわいで安寧を願う 上町台地相撲パノラマ

江戸中期の百科事典と相撲

『和漢三才図会』は江戸中期に編纂された百科事典。編纂者の寺島良安の杏林堂は、高津宮の北側にあったと言われている。同書では、相撲についての記述や、相撲好きの河童の話、また草花すもうに使われた「すまるとりくさ（角紙草）」や「すみれ（重草）」なども絵入りで紹介されている。



お相撲さんは、上町台地に春を呼ぶ使者でした

鈴木忠子さん（スズキ薬局 薬剤師）

私は、戦後すぐに空堀商店街で薬局を開業してから、この界隈のことをずっと見続けてきました。タニマチで知られる薄（すき）病院には、夫が入院していたこともあり、内部の様子も覚えていますが、土俵などはもうありませんでした。昭和30年代の頃は、商店街をお相撲さんが行き来していた情景を覚えていました。大きなかかとでも目立つように、まだ寒いのに裸足にぞうりで、上も浴衣だけの薄着で、よく若い力士が買い物に来ていました。

鈴木芳郎さん（スズキ薬局 薬剤師）

母の話を思い出したのは、その頃、付近の小学生の間ではお相撲さんの宿舎を回っては、サインをもらうのが流行っていたこと。私も友だちと連れだって、中寺町から生玉さんの南の方まで遠征していました。いちばん感激したのは、栃ノ海に会ったこと。負けて不機嫌な力士もいました（笑）。そんなお相撲さんの姿を見かけて、春場所の季節やなあと感じていました。なにやらまちも活気づいて、気分が盛り上がったといったものでした。

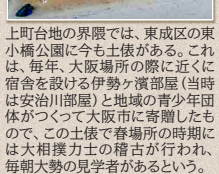
三光神社 ④

境内の野見宿禰神社の祭神は相撲の始祖とも言われる野見宿禰（のみすくね）。幕末に天満宮原屋敷に勧請されたものが難波新地に移された後、明治19（1886）年に三光神社内に遷座されたもの。また本殿前の鳥居脇にあり、空襲の惨禍を伝える片柱の鳥居には昔の相撲関係者、陣幕久五郎、竹鶴寛八、美保関長八郎、葛城徳蔵、朝日山太郎石南門・押尾川・藤島和郎・不知火・岩友幸助という名が刻まれている。



●まちにある土俵 ⑥

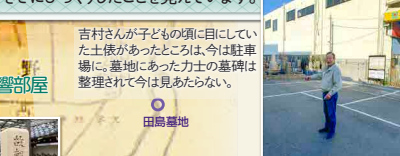
上町台地の界隈では、東成区の東小橋公園に今も土俵がある。これは、毎年、大坂場所の際に近くに宿舎を設ける伊勢ヶ濱部屋（当時は安治川部屋）と地域の青少年団体がつづいて大阪市に寄贈したもので、この土俵で春場所の時期には大相撲力士の稽古が行われ、毎朝大勢の見学者があるという。



生野の相撲集団の伝統と力士墓

吉村健一さん（旭進ガス器製作所社長）

子ども時代、昭和30（1955）年前後の頃に、近所に斎場と墓地があり、その裏手に土俵がありました。青年団の兄さんたちが、そこで相撲をとっていたのを覚えています。悪ガキたちは、その墓地の中でも集まって遊び回っていたけれども、そんな時の目印はいつかあった大きな墓石でした。それは、お相撲さんのお墓で、地方で活躍した村相撲の親方級の人のものでした。昔は、その人の引退時に一門の人がお金を出して生前墓を建ててお送りがあったそうです。子ども心に、お相撲さんだから墓も大きいんじゃないかと素直に思っていました。もう少し成長して、難波に大相撲を見に行ったら、本物の力士を初めて目にしたときは、その大きさにびっくりしたことを覚えています。



●盛んだった村相撲

江戸期から戦後の時期まで大阪相撲とともに近郊地域では村相撲が盛んに行われ、各所に相撲集団が組織された。両者の関係は力士の送り出しや相撲興行などで相互に深いもので、旧村の墓地などに建てられた力士の立派な墓や神社に奉納された板番付などからその盛況ぶりが見られる。

